
近衛の息子

素浪人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近衛の息子

【Nコード】

N8392X

【作者名】

素浪人

【あらすじ】

近衛詠春の息子として生を受けた男。

彼は父とその後生まれた妹のために、頑張るぞい！

決意という導入部

昨日の話だ。

俺は庭で一人ボール遊びをしている所に母さんが来たので、急いでボールを拾って駆け寄った。

母さんは大分前からお腹が大きくなり、もうすぐ俺の妹が生まれるらしい。

母さんのお腹に耳を当てて赤ちゃんが動く音を聞いていると、母さんは言った。

「ねえ水葉。木乃香が生まれたらあなたはお兄ちゃんになるわ。

だから、木乃香のこと、ちゃんと守ってあげてね。」

「えー、そんなのめんどくさいよ!。」

「ふふ、だめよ。お兄ちゃんなんだから。お兄ちゃんは妹の事を守ってあげないと。」

「分かったよ。木乃香は俺が守るよ。」

「うふふ、ありがとう水葉。それと、お父さんの事も良く見てあげてね。」

あの人はずぐ無茶ばかりしちゃうから。」

「分かった!。」

その後すぐ、陣痛が始まり木乃香が生まれた。

だがその代償として、母さんが居なくなつた。

母さん、……父さんと木乃香は俺が守るよ。だから安心して天国で見守つてて。

刹那がやってきた。

目が覚めて一番初めに気がつくのははずめが鳴いていることだった。その事に、ああ朝だ。と思い、バツと布団を自ら剥ぐ。既に着慣れた着物に袖を通し、身支度を整えると、まずは洗面所に行き顔を洗った。

冷たい水で目覚ましをした後は、大好きな兄さまの下へと急ぐ。

「兄さま」

どお〜んと音がしてベットが微妙に軋むがお構いなし。木乃香はそのまま兄さまの寝ているベットにダイブした。

「ぐほあ！」

兄さまが苦しそくに呻いた。

「こ、木乃香あ〜。朝からこれはちょっと辛いぞ〜」

「えへへ、おはよう兄さま」

兄さまはそっぴいなながらもその手でやさしく頭を撫でてくれる。そんな兄さまに嬉しさを隠せず抱きついてしまうのも仕方ない事なのだ。

兄さまが洗面所で顔を洗い終わるのを待ってから、二人で庭に出る。

「さて何時も通りやるか。」

「うん！」

そういうと、兄さまの部屋から持ってきたラジカセのスイッチを押す。

腕を前から上げて背伸びの運動

ラジオ体操が始まった。

「ふう、お疲れ様、さあみんな、今日も一日頑張ろう！」

「はい！」

ガチャッと停止ボタンを押しながら兄さまは屋敷のお手伝いさんたちと言った。

その言葉を受け、お手伝いさんたちは各々の仕事とに戻った。

このラジオ体操は兄さまが自主的に始めたもので、初めは兄さま一人で毎朝やっていたのが、私も私もお手伝いさんが参加し始め、いつの間にか屋敷の者全員が一緒になって行っていたそうだ。

兄さまはこれを、「結束が深まっていいな」と言っていた。結束ってなんだろう？

「お疲れ様です。水葉、木乃香」

「父さん。おはよう」

「父さま。おはよう」

「おはよう、二人とも。今日も元気があってよいことです」

片づけをしている私たちの前に来て、父さまが話しかけてきた。

父さまはいつも忙しい人だ。

実は父さまは偉い人らしく、いつも部屋に籠もってお仕事ばかりしている。

全然構ってくれないので、寂しくていつも泣いていたが、兄さまが言った「僕はずっとお前のそばにいるから、父さんの分もずっとお前のそばにいるから泣かないでくれ」という言葉で私は泣き止んだ。例え父さまがいなくても、私には兄さまがいる。兄さまは約束を破らない。現に兄さまは寝る時と学校に行っている時意外は常に私の傍に居て一緒に遊んでくれた。そんな兄さまが私は大好きだった。

「さて、木乃香。実は君に良い知らせがあるんだ。」

「え〜ほんまに？ なんやろな〜」

「うん、ちょうど来たようだからね。……おーい刹那君、こっちへおいで」

父さまが呼びかける方を兄さまと二人で見ると黒い髪の女の子がこっちを見ていた。

「およ、誰だあの子？」

「はじめてみる子や〜。お友達になれへんかな〜」

同い年くらいの子に見えた。そんでちょっと寂しそうな目をしているのが気になった。

鳥族の村から、追い払われるように逃げてきた私は近衛詠春という男の人に拾われた。

夜も更けていたので、詠春さんに言われるがまま屋敷で一日を過ごし、

翌日、呼ばれて庭に出てみると私と同い年くらいの女の子と少し上だと思ふ男の子が居た。

「おーい、こっちにおいで。」

同い年くらいの子で私に積極的に話しかけてくれる人なんて居なかった。

だからだろう。嬉しくなつて全力なのであの子達の元へ掛けていった。

「うん！ 今行く！」

鳥族の村に禁忌の白翼を持つ子供が生まれ、追い出されたという話を聞き、私はその子を保護するために探す事にした。

程なくして見つかったのはまだ木乃香くらいの子だった。
とりあえず、保護しうちで養う事にした。まずはうちの子たちに会
わせてみようと思う。

ちなみにお願いで見せてもらった白い翼はとてもきれいだった。

今日、木乃香に新しい友達が出来た。

名前は桜崎刹那。もう親もいなくてうちにいるしかないらしい。そ
れなら……。

「ねえ父さん。刹那ってもう親も兄弟も居ないんでしょ？」

「水葉！、それを彼女の前では言っではいけませんよ！？」

夜、いまだ仕事をしている私のところに突然水葉がやってきた。ど
うやら刹那くんについて聞きたいらしい。

「分かったよ、で？ どうなの？」

「……はあ、そうですよ。彼女は天涯孤独の身です」

「なら父さん、刹那をうちの子にしようよー！」

「な！ 刹那くんをですか!？」

考えても見なかった事を言われ、驚いていると、水葉が話し始めた。

「そうだよ！ 刹那つてずっとうちに居るんでしょ？ それで親も兄弟も居ないたった一人の桜崎はきつと辛いよ。苗字だけで他人になっちゃうよ。それじゃあかわいそうだ!」

そうか、水葉は一人である刹那くんに同情しましたか。

例えば、昔から水葉は家族を大事にする子でした。

私と木乃香、二人の距離が離れないように、時折木乃香を連れて私の仕事場に来て遊びながら私のことを心配そうに見ていましたね。

そんな水葉だからこそ、家族が居ない刹那くんが気になったんですよ。

孤児はそこまで珍しくありません……ですが、これも何かの縁ですよ。

「……………そうですね。……………水葉」

「なに?」

「あなたは彼女にお兄さんとして接してあげられますか?」

「……………もちろんだよ！ 刹那も木乃香みたいにする!」

「そうですね、分かりました。後ほど刹那さんの意思を聞いて近衛家の養子に迎え入れましょう。」

「わーい! やった!。家族が増えるぞー!」

喜ぶ水葉を見て、私も思わず笑みを浮かべました。
本当にいい子に育ってくれました。

木乃葉さん。私たちの子供たちは元気に、そしてやさしい子に育っていますよ。

裏について学びました。刹那が青山に家に行きました。

あれから刹那は近衛家の養子となり、近衛刹那となった。

もちろん、近衛家に入る事で多方面から反発があつたが、親に捨てられて孤児になったこと、剣術の才能という将来性を持つてそれらを父さんがねじ伏せ、刹那は晴れて俺たちの家族になった。

一応年齢と誕生日を聞いてみた所、木乃香より2ヶ月年上という事で近衛家長女になってしまった。

お姉さんになつたという事で、本人は少々やり難そうな顔をしていたが、

一月も経てば木乃香の世話をする立派なお姉さんとなっていた。(本人談)

まあ俺から言わせればどっちも大して変わらないけどね。

と、いうわけで、今日もいつも通り3人で遊んでいる。

刹那は何気に神鳴流という剣術を学んでいるらしい。そのため、朝体操を行った後は即車で移動という地味にVIP待遇だった。さすがは近衛の娘だ。

その間俺たちはというと、3人で遊ぶ事に慣れてしまったため、刹那がいらない間なんだか暇になってしまった。二人で遊んでもなんだか盛り上がりがないし、何か無いかと父さんに尋ねたら刹那と一緒に剣術をしないかと言って来た。

言い方からして俺にだけ言ってるようだが、正直そんな重いもの持つて振り回せるとは思えない。

山暮らして体力の方は自信はあるが、どうもそういった事柄には興

味を持ってなくて、以前刹那の持っていた刀を持たせてもらったが、重くて持てないほどだった。もちろん木乃香もだ。

そんなわけで父さんの提案は却下。

そもそも俺が剣術ならうちやったら昼間木乃香一人になっちゃうでしよって怒っておいた。

父さんも、そうでしたね迂闊でした。申し訳ありません。と謝ってきた。今回だけだよ。と許してあげたら苦笑いしてた。

結局の所やることがないという事で、庭で木乃香と二人どうしよっかーと首を捻っていたら、父さんが来て、今日の夜、刹那も含めて3人に大事なお話がありますと言って来た。

夜。俺たち3人で、父さんの部屋に行った。

部屋には父さんの他に、よく刹那と話をしている鶴子姉さんも一緒に居た。

なんだかまじめな顔をしているので、何かしちゃったか心配になったけど、どうやら違うみたいだった。

父さんが、俺と木乃香を見て、二人には秘密にしていた事があります。と語り始めた。

……要するに、この世には魔法のような力が存在していると。

呪文を唱えると、不思議現象を起こす事が出来て、すごいと。うちは関西呪術協会という組織で、関西で一番大きい組織で、陰陽師がいっぱい居ると。そういった話だった。ちなみに刹那は既にこの話を知っていた。よくよく考えればそういうこともあるかもしれないなあと思った。なんせ刹那羽生えてるし。

さらに話を聞くと、木乃香はとんでもない魔力を秘めていてやばいらしい。

次期関西呪術協会の長として期待されてるらしい……俺は？俺も木乃香ほどではないが、関西呪術協会の中ではNo.2の魔力を持つてるらしい。やばい。

最後に俺と木乃香に陰陽師になんない？ということでした。

ちなみに鶴子姉さんが隣に居たのは神鳴流の重鎮で、この関西呪術協会にも大きな影響力を持っているかららしい。姉さんは刹那を直弟子として育てたいと言っていて、そのためにはこの屋敷から出て一時青山の家で朝昼晩と一日中修行に当てたいらしい。なんか合宿みたいだ。

刹那自身、その話には乗り気だが木乃香の事が心配らしい。だから将来のためだ、頑張つて来い！木乃香の事は俺に任せろ。頼れる女になって帰つて来いよ！と言っておいた。

刹那は、おおきに兄さん、木乃香を頼むで。と泣きながら言った。俺も木乃香も泣いた。

んで父さんが期待してるのは、俺たち子供、Sで刹那を前衛に、俺が中衛、木乃香を後衛という形のフォーメーションでチームを組むことらしい。正直面白そうだと思うた。

俺が立ち上がって、がんばるぞー！と右手を上げたら刹那と木乃香

もおー！と言って手を上げた。

これで一つ夢が出来た。実現するために頑張るぞーと言ったら、では明日から二人とも頑張りましょうねと父さんに言われた。うん。頑張るぞー！

「ちなみに水葉は前衛後衛どちらでも動けるように、私と体術の訓練を行いますからそのつもりで」
ええー、聞いてないよー。

友人も出来ました。(前書き)

設定は適当です。

友人も出来ました。

開催呪術協会の総本山である”カガヒコノヤシロ？毘古社”は人里から離れた場所にあり、基本的に移動はバスを使って行う。そのため、幼稚園には行かず、総本山にて幼児教育を受けていた子供たちは小学校から集団教育を受ける事になる。

「では、行って来るよ。」

「行ってらっしゃい。」

長い長い階段を降り、用意された車に乗り何時も通り学校へ向かう。

「じゃあ、山本さん、何時もの場所までお願いします。」

「かしこまりました。」

移動中も陰陽道の基礎の本を読んで勉強する。これはま木乃香や刹那とは違い、小学生のため修行の時間が限られる事もあって、僅かな時間も惜しんで勉強しろとの先生の教えから来ている。

「あゝ分かんないわあ」

「精が出ますね坊ちゃん。」

「坊ちゃんは止めてよ〜」

「ははは。」

山本さんは何時も坊ちゃんと俺を呼んでくる。本当にそんな柄じゃないから止めて欲しい。

「さて、着きましたよ坊ちゃん。」

「もう着いちゃったか、………よし、山本さん。ありがと！」

読んでた本を車の中に置き、ランドセルを手に持って車を降りる。

「では夕方、ここでお待ちしております。行ってらっしゃいませ」

「行ってくる！」

山本さんに手を振って学校まで歩く。山本さんが近くまで送ってくれるため（校門まではさすがに目立つため、近辺までになっている）学校はすぐそこだ。

なのでのんびり学校まで歩いていると、

「おーい、水葉！」

「あれ、火水じゃん。」

近くのコンビニから友人が出てきたのは、入学以来の友人である八坂火水さかひみずだった。

「相変わらず朝早いよな、お前の姿を見つけたから店から出てきちゃったじゃん」

「そんなの知らないよ!」

「うへえ、冷たい冷たい。水葉さん冷たいよ」

「ほれ、良いから行くぞ。」

「へいへい」

軽口を叩いてくる火水のけつを叩いて先を進む。雑談をしながら登校すると教室に一番のりしたようだ。これもいつも通り。

「そついえば俺、最近神鳴流を始めたぜ。」

席に付いてランドセルを机の脇に引つ掛けてると火水が話し掛けてきた。

「うっそ、お前までやるの？ 追いつかれそうだ、怖い」

「ふっふっふ、すぐ追いついてやるからな」

火水は家の事情により裏に精通している。

火水の父親である八坂木土やまかきつちさんは本山にたまに来て依頼を受けているので、そこら辺はこつちも良く知っている。

「よくよく考えると、きつちさん（小さい頃名前が呼べなくてこう呼んでた）、刀も持ってたな。」

「きつちさん神鳴流使えるの？」

「ああ、オヤジは神鳴流も達人並だよ。よく詠春さんと一緒に練習してたらしいな」

「へえ、父さんときっちゃんが！ 知らなかった」

「ふっふっふ、そうだろそうだろ、俺も昨日オヤジから初めて聞いた」

「なんだよそれ」

時間も時間になり、裏の事を知らないクラスメイトたちが入ってきた。これ以降はこの話は出来ない。

俺たちは話を切り替え、バカ話に興じるのであった。

「ではお嬢様、今見せた術を使ってみてくれはりますか？」

「はい。」

先生の指示に従って真言による妖怪召喚を行う。

「オン」

魔力を込めた真言を発する。

ボンッ！

「うっ」

召喚の影響で砂埃が沸き立つ。

出てきたのは先ほど先生が召喚したぬいぐるみみたいなお猿さんやなく、きれいなお姉さんやった。

「およよ?」

「召喚により馳せ参じました。私は茨木童子、ご命令を」

「ななな! ……………。」

先生も驚いてた。うちが間違えたからかな? どないしよう。

「そつや! お嬢様、前鬼・後鬼として契約してはどうや?」

「ええ!? このきれいなお姉さんと?」

「私と契約を!」

先生の言い方からして、お姉さんは妖怪なんかな?

……………むむむ。頑張ってみよう!

「ゴホン! 茨木童子さん。うちと契約してくれまへんか?」

とりあえず、笑顔で聞いてみた。

「お断りします。私は誰とも契約するつもりはありません」

断られた。問答無用で断られた。

「先生、だめやて」

「んー。こんなすごい鬼さんと呼べることはもう無いかも知れへん。こつなつたら、物量作戦や！ お嬢様、頑張つて説得しましょ。」

「了解です。たいちよー！」

びしつと敬礼してこれから頑張つて”説得”する鬼さんを見つめる。

「うっ！ だ、だめですからね。私は誰とも契約なんかしません！」

冷や汗を掻きながらぷいつと顔を背ける鬼さん。

「うっふっふ、最初は誰もがそう言うんや。大人しく私に”説得”されなはれ！！」

「お嬢様がんばー！」

「いやああああ！！！！」

その日、関西呪術協会の総本山では女性の悲鳴が止まなかったとい
う。

友人も出来ました。(後書き)

水葉は小学3年生に進学

木乃香は5歳。刹那も5歳です。

木乃香は陰陽術専門

刹那は神鳴流専門で学んでいます。

水葉は両方です。

ちなみに先生は千草先生です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8392x/>

近衛の息子

2011年11月3日03時07分発行